
母の怪我

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母の怪我

【Nコード】

N8761H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

もういい歳なのに母親に頼っているところのある美佳。けれどいざその母が怪我をしてそこでわかったことは。家族の大切さを些細なことから書いてみました。

第一章

母の怪我

百瀬美佳は普通のOLである。歳は二十七歳で一応彼氏はいるが結婚はまだ考えていない。髪はボブにしている目は少し垂れ気味で笑っている感じた。口は少しばかり大きめで鼻は小さい。お面のおかめに似ているということで昔から仇名はお多福だのおかめだの言われている。そんな女だ。

実家から離れたことはなく高校も大学も今の会社も実家から通っている。両親と一緒に悠々自適の生活というわけである。

「うちにいるのはいいのよ」

彼女にそっくりの母親の美並はいつも彼女に言う。

「それでもね」

「またいつもの言葉？」

自分の部屋に掃除機を持ってやって来た母に対してうんざりとした顔を向けて応える。クッションの上にジーンズとシャツという格好で寝転がりそのうえでファッション雑誌を見ながら。

「あれでしょ。家事もちゃんとしなさいでしょ」

「そうよ。部屋だってこんなに散らかって」

確かに汚い。あちこちに袋やら小道具やら本やらがばら撒かれている。ベッドの周りもそうで足の踏み場もない程である。ゴキブリが出てもおかしくはない。

「掃除しなさい、掃除」

「気が向いたらするわ」

「こんな調子で言葉を返す。」

「気が向いたらね」

「そう言ってどれだけ掃除してないのよ」

「さあ」

如何にもやる気のない言葉だった。

「気が向いたらだから。何時かね」

「じゃあずつとしないのね」

「去年したばかりじゃない」

「今度はこう言った。」

「去年。したわよね」

「去年の大晦日でしょ」

母はその日が何時かはつきりと覚えていた。

「それで今何月？」

「さつきが奇麗ね」

「それから全然お掃除してないじゃない。どうするのよ」

「掃除しなくても死なないわよ」

目にまでやる気が見られない。

「心配しなくても。だからいいのよ」

「家事は何もしないし」

「仕事してるから疲れてるの」

このことを言い訳にする。どちらにしる全然やる気がないのかわかる。

「お母さん家にいるし。だからいいじゃない」

「将来靖久君と結婚するんでしょ」

その美佳の彼氏である。

「家、確か」

「そうよ。鰻屋よ」

それも結構大きな店である。

「それがどうかしたの？」

「だったらせめて料理だけでもしなさい」

母の言葉は厳しい。

「料理屋に嫁ぐんだからね」

「料理はしてるじゃない」

娘はむっとした顔になって母の今の言葉に言い返した。

「ちゃんと。してるでしょ」

「お醤油使ったのもしなさい」

実は美佳はイタリアン派である。何かといえばオリーブにトマトである。和食は食べるのは好きだが作ることはないのだ。母はそのことを言っているのだ。

「わかったわね」

「はいはい」

「とにかく部屋は片付ける」

「来月になったらね」

「今しなさい、今」

「後でするから」

こんなふうだった。とにかく家事をしない美佳だった。こうしたいい加減な日々を送っていたがある日のこと。急にその母が事故に遭ってしまった。交通事故だった。

「えっ、骨折したの？」

「参ったわ」

病院の病室である。白いベッドの中に母がいた。病院の患者の服を着て左足を厚いギプスで覆って吊り上げている。何処を怪我したのかは明白だった。

「とりあえず命は何ともしなかつたけれど」

「またどうして怪我なんか」

「横断歩道歩いてたらバイクが突っ込んできたのよ」

よくある話である。

第二章

「向こうの信号無視でね。それでね」

「はねられてなのね」

「そういうことよ。まあ保険は入ってたし向こうも慰謝料とか出してきてそうしたややこしい話はもう終わってるけれどね」

「よかったじゃない」

美佳はそうした難しくて厄介な話は終わっていると聞いてまずは安心した。しかし美並はそのほっとした顔になった娘に対して言ったのだった。

「よくないわよ」

「何で？」

「お母さん暫く入院するから」

「こう娘に言うのだった。」

「一月位。入院するからね」

「命があつてよかつたじゃない」

母がどうしてよくないと言うのかわかっていない娘だった。

「確かに一ヶ月は困るでしょうけれど」

「私は困らないわよ」

平然とした顔になつての今度の言葉だった。

「全然ね。むしろ休めていいわ」

「だったら何でよくないのよ」

「よくないのは家のこと」

「ここで家のことを話に出してきた。」

「家よ。家事する人いなくなっちゃうじゃない」

「ああ、そういえばそうね」

まだ事情をわかつておらず平気な顔で応える娘だった。

「そうなるのよね」

「だからよ。あんたが」

娘の顔を見据えての言葉だった。

「あなたが家事やるのよ。いいわね」

「何で私が？」

今の母の言葉にはすぐにむっとした顔になって言い返した。

「私が家事をしなくちゃいけないのよ。何でなのよ」

「何でってあなたが今家にいるたった一人の女じゃない」

実はそうなのだった。

「お父さんもお兄ちゃんもそういうことできないでしょ。だからあなたなのよ」

「私もできないわよ」

「できなければしなさい」

母の言葉がここでまた厳しいものになった。

「何だかんだで家事は女のするものだから」

「誰が決めたのよ、そんなこと」

「誰でもいいのよ」

そんなことはどうでもいいというのだった。強引だがそこには言葉以上の説得力があった。何故かというと母親の言葉であるからだ。

「わかったわね。それじゃあよ」

「私に家事をやれっていうのね」

「お母さんが退院するまでね」

期限は設けられた。

「それまでよ。いいわね」

「断る権利は？」

「ないわよ」

これが返答であった。

「わかったわね。それじゃあ」

「わかりたくはないけれどわかったわ」

無然とした顔になって母の言葉に頷く。甚だ不本意であったがそれでもだった。母の言葉の前には今はどうしても逆らえないのであった。

「じゃあ。やっておくわ」

「頑張りなさい」

こう娘にエールを送った。

「あんたにも悪いことじゃないからね」

「だったらいいけれどね」

こうして母が入院している間彼女が代わりに家事をすることになった。まずは洗濯だがこれは楽だった。自動式なのでとりあえず洗濯物と洗剤を放り込んでボタンを押すだけだ。乾かすのも乾燥機があった。だからこれは問題がなかった。しかし問題は他にあった。

「やれやれだわ」

「おい美佳」

テーブルに座りながら娘に対して父親と兄が声をかけてくる。どちらもやたらと顔が長くあのアントニオ猪木に似ている。皺が多少あるかないか程度の違いだけでどちらもそっくりである。その二人が料理を作っている彼女に対して声をかけてきたのである。

第三章

「今日のおかず何だ？」

「いい加減イタリアものばかりやるなよ」

「わかってるわよ」

少し怒った声で二人に言い返す。見れば鍋にジャガイモや肉、それに人参や玉ねぎといったものを入れて醤油とみりんで煮込んでい
る。肉じゃがであった。

「もうすぐできるからね」

「肉じゃがが？」

「ええ、そうよ」

父に対して答える。

「それとお味噌汁よ」

「何だ、作れるんだな」

兄は彼女が和食を作っているのを見て言った。

「御前も和食を」

「作りたくないわよ。面倒臭い」

何故和食を作りたいがらないかというところが理由だった。彼女に
とっては色々面倒なのだ。イタリア料理は好きだからこそ苦にな
らないが和食の面倒さは我慢できないのである。この辺りは実に勝
手ではあるが。

「こんなの。お母さんも毎日作ってたのね」

「当たり前だろ？」

その長い顎で言う父だった。

「他には中華料理もあったぞ」

「中華はまだいけるわ」

とりあえず前からりょうりだけにはしていたのである。これだけは
助かっていた。

「それでも。和食って本当に面倒ね」

「後皿洗いもな」

「わかつてるわよ。全く」

うんざりとした声で兄に言葉を返す。言葉を返しながら色々と考えていた。

「後は猫に餌をあげて砂も入れて」

猫の世話もあるのだった。

「朝起きたら洗濯してその間にお掃除軽くして洗濯物畳んで会社に行つて」

当然会社にも行かなくてはいけないのである。

「ああ、食器洗つたらお風呂も洗わないと。何でこんなに忙しいのよ」

急に忙しくなつてしまつたのだった。今や彼女は働きながら家事もこなしていた。とりあえず目立つたミスはなかったが大変なのは変わりが無い。それで四苦八苦しているのだった。

朝起きても疲れは充分に取れず電車の中で頑張つて寝る。そうして会社の仕事に入る。スタミナドリンクも飲むようになった。あくせくと会社でも家でも働いていた。疲れは何とか最低限にするようにしていたがそれでも溜まる。休日は家事を済ませたらそのままスーパー銭湯に行つたりもした。こうして生きていた。

するとやがて。会社でも家でもこう言われるようになった。

「あれ百瀬君」

「変わった？」

三日会わずれば、といった感じの言葉であった。

「何か生き生きしてるね」

「顔に張りがあるって感じ？」

「そうですか？」

まずは会社の中で男の人達に言われた。彼等の言葉はとりあえずお世辞だと思つていた。こうした言葉は何かあるとすぐに言われることだからだ。

しかしであった。今度は外に仕事に出てまた言われた。今度はも

つとはつきりした言葉だった。

「若返りましたね」

「若返ったって」

「目に活力もありますし」

今度はこう言われたのだ。しかも言った相手が初老だが結構ダンディな雰囲気の人だったから余計に気になった。やはり格好いい相手に言われた方が心に残る。

続いて社内の同僚のOL達にもだ。

「あんたメイクとか変えたの？」

「奇麗になつたわよ」

「全然変えてないわよ」

これは自分のことだからよくわかっている。そんなものは全く変えてはいない。

「そんなの。全然よ」

「そうなの？」

「本当にちよつと前よりずっと奇麗になつたわよ」

彼女の顔を見ながら言うのである。これでいい加減妙だと思いだした。流石にお世辞やそういった類のものではないとわかってきたのだ。

「何か御前最近な」

彼氏のその靖久とのデート中にも言われた。彼は鰻屋の息子なので彼のオフに彼女は有給休暇と取ってそれでデートをしているのだ。そのデートをしている遊園地で休憩でベンチで並んで自動販売機のお茶を飲んでいる時に言われた。二人晴れ晴れとした青空の下でお茶を飲んでいる。

「変わったな」

「靖久君も言うのね」

「俺だけじゃないのかよ」

彼はその赤茶色の長めの髪の毛のいささか童顔の顔を少し驚かせてきた。少しばかり鋭い目が見開かれた。

第四章

「周りも同じこと言ってるのかよ」

「最近よく言われるのよ」

「こう彼に答えた。」

「何でかね」

「っていうか御前何か引き締まったし」

「そうかしら」

「雰囲気かな。何かこうな」

具体的に手をあれこれと動かす。それは何処か陶器を作る時のそれに似ている。

「引き締まってな。顔なんかな」

「引き締まったってどういうの？」

「表情がよくなったんだよ」

「これが彼の言葉だった。」

「きりつとしてな。しかも目の光も強くなったし」

「それ言われたことあるけれど」

「メイクとか明るくしたわけじゃないよな」

会社の同僚のOL達と同じことを言ってきた。

「別にそういうのじゃないよな」

「メイクは今まで通りよ」

彼にもこのことを話した。

「変えるつもりもないし」

「それでそんなに変わったのかよ」

「スポーツはじめたわけでもエステしてるわけでもないし」

そうしたことはしていない。お金も時間もないのでそんなことをしている余裕がないということもある。何しろ今は会社の仕事と家の仕事でなくてこまいなのだから。

「習い事もしてないし」

「じゃあ何でなんだ？」

「さあ」

問われても首を傾げるばかりだ。

「強いて言うならね」

「何かあるんだな？ やっぱり」

「多分違うと思うけれどうちのお母さん怪我して入院してるじゃない」

このことはもう彼にも話している。それで彼も何度か見舞いに行っている。外見はちゃらちゃらとしているところがあるが意外としっかりしているのである。

「それで私が家事やって」

「それで？」

「そのせいで毎日疲れてるからよく寝れるの」
「考えながら述べた言葉だった。」

「寝る時間は短くなったけれど眠りは深くなったわね」

「それか？」

靖久は彼女の言葉を聞いてそれかと考えた。

「そのせいか？」

「そうじゃないかしら」

まだ首を傾げている美佳だった。

「よくわからないけれど」

「まあ寝るのっていいことだよな」

靖久はそのことはいいことだとした。

「それってよ。まあよ」

「何？」

「奇麗になったのはいいことだよ」

彼は素直にこのことを喜んでいた。

「俺だってな。彼女が奇麗だったら」

「いいのね」

「美人が彼女で嬉しくない奴なんていねえよ」

これはその通りだった。やはり彼女がいればその彼女が美人であれば尚更いい。人間とはそういうものなのである。

「だからな」

「美人になってよかったのね、私が」

「ああ。それじゃあな」

ここで自分が飲んでいるお茶を飲み終えて立ち上がった靖久だった。そのうえで美佳に顔を向けて言ってきた。

「次何処行くんだ？」

「ジェットコースターがいいかしら」

「あれさつき乗っただろ？」

「それじゃあお化け屋敷行く？」

少し考えてから彼に述べた。

「あそこまだ行ってないわよね」

「そうだったよな。じゃあお化け屋敷な」

「ええ」

靖久の言葉に頷いて応える。

「じゃあ行きましょう。今からね」

「行こうぜ。楽しくな」

「うん」

この日はこうして楽しく二人で過ごした。その次の日その喜びを残した顔で明るい顔で母の見舞いに行くと。いきなりこう言われたのであった。

第五章

「私のおかげね」

「いきなり何よ」

見舞いのケーキを手にしたまま思わず彼女に言い返した。

「お母さんのおかげって。お母さん私に何かしたの？」

「したわ」

にこりと笑って娘に言ってきた。

「ちゃんとね。したわよ」

「何をよ」

「あんた綺麗になってるじゃない」

「お母さんも言うのね」

「そんなの見ればわかるわよ」

まず彼女もこのことを美佳に言ってきた。その間に美佳はとりあえず見舞いのケーキを母のベッドの側にあるテーブルの上に置いた。

「顔を見ればすぐにね」

「それでそれがどうかしたの？」

「それが私のおかげなのよ」

またこう言うのだった。

「それがね」

「意味わからないけれど」

口を少し尖らせて母に言った。

「どういうことなのよ、一体」

「だから。あんた今何してるのよ」

「お母さんの代わりに家事してるわ」

今自分がしていることをそのまま述べ返した。

「お母さんが交通事故に遭ったおかげでね」

「それよ」

美並はここぞとばかりに娘に対して言ってきた。

「それなのよ。わかる?」
「交通事故のおかげだっていうの?」
「そうよ。私が怪我しなかったらあんた家事なんてしないわよね」
「まあそれはね」
「しないという絶対の自信があった。」
「その通りよ。絶対しないわ」
「それよ。けれど私が怪我したから」
「私がこうして家事をやってるってことよね」
「それがいいのよ」
「また言うのだった。」
「それがね。あんた確かに今かなり大変でしょ」
「もってんてこまいよ」
「困った顔で言った。真顔である。」
「何が何だか。朝から晩までね」
「大変なのがいいのよ」
「また言う母だった。」
「頑張らないとって思うわよね」
「それはね」
母の今の言葉に伝えて頷く。
「思うわ。気合入れてやってるわよ」
「だから輝くのよ。人間何でも気合入れてやるとね」
「輝くっていうのね」
「それが女を磨くのよ」
「今度はいささか古風な言葉を述べてきた。」
「女をね。わかるかしら」
「そういうものなの」
話を聞いた美佳は目を二度三度しばたかせたうえで呟くようにして述べた。
「必死にやればなのね」
「ただ働いて家に帰ってぐうたらするだけ」

母の今度の言葉は美佳のこれまでの生活をかなり悪く表現してきた。意識してそうしているのであるが。

「それで朝はギリギリまで寝て慌てて会社に行ってたわよね」

「ええ」

「部屋じゃ雑誌とか漫画読んだり音楽聴いたりゲームするだけ」

「そんな暇全くなかったけれどね」

「それでどうして磨けるのよ」

娘の顔を見ての言葉だった。

「そうでしょ？気合入れて家事もしていかない」と

「駄目だっというのね」

「そういうことよ。だから今のあなたは綺麗に見えるのよ」

そのものずばりといった口調になっている母だった。

「わかったわね。わかったらよ」

「これからも家事をしろってこと？」

「その通りよ。綺麗になりたかったらね」

「そういえば最近痩せてきたし」

美佳はこのことにも気付いた。

「それもやつれたんじゃないやなくて体脂肪率が減ってきたっていういい感じの」

「スタイルも少しよくなってるじゃない」

「そうかしら」

「家事は身体動かすからよ」

次に母が言ったのはこのことだった。

「だからよ。痩せたのよ」

「そうだったの」

これまたあらたにわかった事実だった。

「それでだったの」

「それもわかったわね。わかったらよ」

「ええ」

「頑張りなさい。いいわね」

「そうね。家事もね」

母の言葉に言われるまま頷いた。

「やっていくわ。これからはね」

「いいことよ。女はね、何でもいいから気合を入れてやるのよ」

「いいことをね」

「悪いことをしたら悪い女になるわよ」

これは言うまでもなかった。世の中の常識である。

「ぐうたらなことをしたらぐうたらな女になって」

「それでいいことをしたらね」

「そうよ。いい女になるわ」

にこりと笑って娘に告げた。

「わかったわね。じゃあこれからは」

「ええ。いい女になるわ」

にこりと笑って母に答えた。

「頑張つてね」

これが彼女の決意だった。それから彼女は母が退院してからも家事も頑張るようになった。それは結婚してからも続き回りからいつも美人だ美人だと言われていた。しかしその美容の秘訣はというとこれであった。しかし彼女自身がこのことを話してもまさかと思う人が殆どだった。実際にやってみないとわからないものなのだろうか。しかし彼女がこれで奇麗になったのは紛れもない事実である。

母の怪我 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761h/>

母の怪我

2010年10月8日15時49分発行